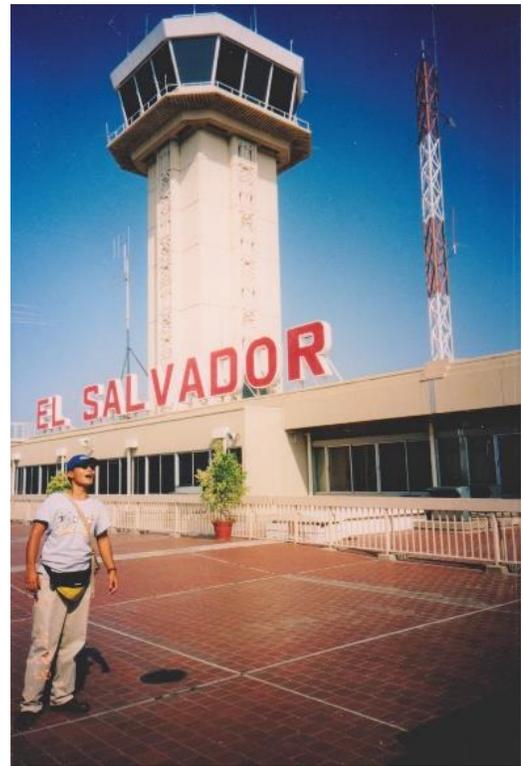


ぼくの故郷、エルサルバドル

初めてエルサルバドルの地を踏んだのは 1997 年 4 月だった。暑い中、毎日バスの扉にぶら下がりながら語学教室に通っていたのを思い出すことができる。当時は緊張のせいかな、日本を出発する前から胃腸の調子が悪く、おまけにエルサルバドルでは道端でのつまみ食いがうまいのでいつまで経っても腹を壊したまま過ごしていた。腹を壊してでも食べ続けたのは、コンチャス・ネグラスという赤貝のセビチェや生牡蠣。本当に美味しいのだが、あたると結構大変だった思い出が未だに脳裏をよぎる。それともう一つ食べ倒したものがあつた。ププサだ。とにかく食べ続けた。実はププサ本体と同じく重要なポイントはピクルスであることに後々気付いた。ピクルスはお店によって全然味が違うのだ。ププサはトムロコシ粉ベースのオーソドックススタイルと日本人にはもってこいの米粉バージョンがあつた。中に詰められる具は、当時こそ種類が増え始めた頃だと思つたが、通常はチーズ・チチャロン（豚肉ベース）・フリホーレス・ミックスであつた。

海産物の入つたものや、甘いもの、野菜の類の入つたものなどが出始めていた。毎日食べても飽きないププサが大好きだつた。朝からバス停の横でチョコレートすすりながら食するププサの味は忘れられない。仕事が終わつた後のププサもエルサルバドルの素晴らしい夕焼けと相まって思い出深い味となつた。



当時は内戦終結後 5 年が経過した時期であり、アジア系の人間が珍しいのか、50 m 歩いたたびに「チノ！」と声をかけられていた。「チノ」とは、そのまま訳せば中国人のことである。最初は「チノじゃないよ、日本人だよ。」と答えたりしていたが、頻繁にチノと言われ続けだんだん嫌気がさしてきていた。しかし、大抵の人は興味があるから声をかけていることに気付

いた。それから気が楽になった。話すチャンスがあれば話しをして「日本」を説明していた。みんな興味津々で、とてもフレンドリーだった。途端に随分と居心地がよくなってきたことを覚えている。そして彼らが使う「チノ」という言葉は「アジア系の人」を指す言葉であることに気付いた。間違っている使い方かもしれないけど、僕たちだってエルサルバドルがどこにあるかなんてまず答えられない。と言うことは、それを受け入れることから始めてもいいのかなと考えた。本当に気持ちが楽になって、彼らと話しをするのが楽しくなってきた。気持ちを開くことの素晴らしさを感じた時期だった。そして、エルサルバドルのことが本当に好きになった。「雨が降ったから行けなかった」と言って約束を破った僕の友人がいて最初は理解できなかったけど、徐々にわかってきた。いや、分かっていくことで自分から居心地の良い環境を得ることができ始めていた。この分かっていく気持ちこそが相互理解を進める上でとても大切なことだと思う。このことを始めの一步とするだけで、随分と人間関係における環境は良くなり、自分が受け入れられていると感じることができると思う。そして大切な友人がたくさんできた。彼らには僕らが想像もできない体験をしてきた過去はあるが、とても人懐っこく、僕にとっては最高に良い連中だ。



3年間のエルサルバドルでの生活で学んだことは、行ってはいけないところは通らないことや、移動手段をしっかりと考察すること、手荷物はできるだけ持たない、手荷物の持ち方、歩き方やそのルートについて常に考えること、誰と行動するかを考えることとできればエルサルバドル人の知人と行動する、財布を開けっ広げにしない控えめなお金の出し方、職場の同僚に合わせた服装、基本的には

太陽と共に行動する、などなど。これでもかと言うくらい毎日安全に過ごすことについて考えて行動することを身につけた。1分間歩く間に4度から5度は周りを振り返るような歩き方をしていた。そのおかげで、何度かつけられたことがあったが幸い危ない目には合っていない。バスの乗り方についてもその時々で状況に合わせて乗る位置を決めたりしていた。自動車での行動については、前面から太陽の当たるような場面では外から手が見えるのでハンドル上に手を置かないことや、ガラスは全面黒塗りにする、など。駐車する場所は特に注意しなくてはいけない。車上荒らしは、陰に駐車されている普通の車両が狙われやすいからだ。ガソリンスタンドでも給油中は気を抜いてはいけないし、常に周りに気を付ける。毎日走るルートは気を付けようがないが、非常時に備えて逃げるパターンについては良く頭の中で考えていた。とにかく、常に安全に気を付けて行動するようにしていた。一瞬たりとも気を抜くことはなかった。その結果、楽しく過ごすことができた。疲れるが、必ず慣れる。慣れるまで常に気を抜かない。慣れても継続する。これで楽しい生活が可能となる。それでも遭うときは遭う。自分の国ではない異国の地での生活であることを念頭に置き、前向きにリスペクトすることでこの国はあなたの故郷となるに違いない。

このようにして過ごしたエルサルバドルでの3年間。エルサルバドルは僕の故郷になった。そんなに帰郷はできないけど。そして今、僕の大好きなププサをエルサルバドル人である僕の妻が日本の河口湖で焼いている。是非エルサルバドルが恋しくなるほどエルサルバドルで安全に楽しく過ごして、日本に帰国したら河口湖に来てププサを食べてエルサルバドルを懐かしんでほしい。

追記：日本でププサを食べるなら河口湖へ来てください！Facebookは（Perro 河口湖）、Instagramは（perro_elsalvador）で検索可能です。メッセージ待ってます！



伊藤真吾氏

1997年から2000年まで青年海外協力隊（病害虫）として国立農業大学校（ENA）へ派遣される。2003年よりコスタリカの熱帯農業研究高等教育センター（CATIE）付属大学院で生態系農業を学んだ。2007年より三菱商事にて中米・カリブ海地域担当として自動車業界に身を置く。2009年より農業・農村開発コンサルタントとしてグアテマラやニカラグアでのJICAのプロジェクトに従事。現在、コンサルタント業の傍ら家族とともに河口湖を拠点にして楽しい生活をしている。